

英語の発想と日本語の発想

～私の翻訳体験記～

准教授 山中 優

【本日の講義のテーマ】

翻訳とは、二つの言語の間にあるギャップを、のっぴきならない形で乗り越える作業だと言えます。日本語らしい自然な表現を探り当てるには、技術的な事柄以上に、根本的な発想の転換こそが求められるのです。

また、英語を読むとき、それを日本語の発想に置き換えながら読んでいくと、英語を読むときの心理的負担がかなり軽くなります。そのことを、私自身、翻訳の仕事に携わったとき*、如実に味わうことになりました。

それでは、英語と日本語の間には、いったい、どのような発想の違いがあるのでしょうか？ またその発想の違いは、はたして完全に非連続なものなのでしょうか？

*山中優監訳・田総恵子訳『ハイク全集Ⅱ－5 政治学論集』（春秋社、2009年12月20日初版第1刷発行）

① ^{わずかの 滑り} A slight slip of the ^{医 者 の 手} doctor's hand would have meant ^{意味した} instant ^{たちどころの 死} death for the ^{患者} patient. ^{過去分詞} would have done ～したのであろう

〔仮定法：ここでは、過去のことについて事実とは異なる仮定をしたうえで、その仮定のもとで推測を行っている〕

（直訳） 医者の手のはんのわずかの滑りが、患者のたちどころの死を意味したのであろう。

（意訳） 医者の手がほんのわずかに滑っても、患者はたちどころに死んでいたであろう。

英語は名詞中心構文であるのに対し、日本語は動詞中心の性格が強い。

（名詞構文の例）「この事実の認識が、問題の解決に貢献する」

（動詞構文の例）「これが分かれば、問題はずっと解決しやすくなる」

② The mere fact of looking different causes disdain.

(直訳) 他人と違って見えるという単なる事実が、[他人の] 軽蔑を生む。

(意識) 単に他人と違って見えるというだけで、[他人に] 軽蔑される。

③ A humming of insects suggested the autumn.

(直訳) 虫の鳴き声が、秋であったことを思わせた。

(意識) 虫が鳴いていたので、秋であったように思えた。

英語は〈する〉、日本語は〈なる〉

- 英語では、〈ひと・もの〉が他の〈ひと・もの〉をある新しい状態に「する」という捉え方をする：「働きかけ」の発想
- 日本語では、状況がおのずからそう「なる」といった捉え方をする。

因果律の英語、状況との関係の日本語

- 英語では、「動作主性」を人間のみならず無生物にまで拡大して、〈ひと・もの〉が他の〈ひと・もの〉に働きかけ、ある状況を作り出したと、状況を因果律的に解析して捉える。
- 日本語では、状況に反応する人間に密着した視点でものを見る傾向が強いので、ある状況が原因ないし条件として存在し、その結果として、人間は何かをせざるをえなくなったと、全体を、状況と人間との関係のあり方として捉え、表現する：「感受する人間」の発想

④ The force of the smell brought him back to the real world.

bring ~ back ~を引き戻す

(直訳) その臭いの強さが、彼を現実の世界に引き戻した。

(意識) その臭いがあまりにも強かったので、彼は現実の世界に引き戻された。

⑤ In the ^{研究} study of the ^{行動} behaviour of the ^{高等} higher animals, ^{非常に} very ^{滑稽な} funny situations are ^{起こる} apt to arise. be apt to do ～しがちである

(直訳) 高等動物の研究においては、非常に滑稽な状況が起こりがちである。

(意訳) 高等動物を研究していると、非常に滑稽な場面によく出くわす。

日本語に関係代名詞のない理由——英語の〈もの〉指向と日本語の〈こと〉指向

○ 英語は、ある情況ないし出来事を言語化しようとするとき、まずこれを論理的に分析し、分節化して、一個のアイデンティティーをもつと考えられる項を析出し、ある実体的な〈もの〉として名詞化する（たとえば、例文①を参照）。

⇒したがって、その名詞を核として、これに、関係代名詞によって長い修飾句をつなぎ止めてゆくこともできるのである。

○ これに対して、日本語は、情況ないし出来事を、できるだけこれに密着して、まるごとすくい取ろうとする。抽象的に分節化して、実体的な〈もの〉が、もう一つの〈もの〉に働きかける関係として捉えるよりは、あたかも情況が、全体としておのずから成ったというように——つまり、要するに〈こと〉として捉える傾向が強い（往々にして、主語を明確に取り出すことさえしない）。

⑥ Do you know of the ^{何百万人} millions in Asia ^{〈関係代名詞〉} t h a t are suffering from ^{タンパク質} protein ^{不足} deficiency because they ^{得る} get ^{野菜} nothing but vegetables to eat?

know of～ ～について [のこを] 知っている, 聞いて知っている

suffer from～ ～で苦しむ nothing but～ ～以外は何もない

(直訳) 食べるべきものは野菜以外には何物もないため、タンパク質不足で苦しんでいるアジアの何百万人の人々を知っていますか。

この直訳では、出来事の中から〈知る〉の対象として〈アジアの何百万人〉という〈もの〉が取り出され、それに残りの部分が修飾的な叙述として結びつけられている：英語の〈もの〉指向

(意識) アジアの何百万人という人たちは、野菜以外に食べる物がないために、タンパク質不足で苦しんでいること (の) を知っていますか。

この意識では、出来事をそのまま一つのまとまりとして、一つの節の形で表わした〈こと〉的な表現となっている：日本語の〈こと〉指向

⇒関係代名詞は典型的な〈もの〉的構文を作り出す。これは〈こと〉的な表現への指向性の強い日本語の性格には合わない。

⑦そこらに虫の音が聞こえていたので、季節が秋であったことは確かである。

(谷崎潤一郎『少将^{しげもと}滋幹の母』第九章の一節)

この日本語では、「虫の音が聞こえていた」と、状況をそのまますくい取る捉え方をしている。主語さえ必ずしも分離していない。

(サイデンステッカー教授の英訳)

Shigemoto could remember a humming of insects ^{〈関係代名詞〉} t h a t suggested the autumn.

《英訳のプロセス》

1. まず「滋幹」という主体を明確に分離して、それを主語に据える。
2. 「虫の音が聞こえていた」という出来事の全体を‘a humming of insects’ という名詞に集約する。
3. その‘a humming of insects’ という〈もの〉を「滋幹がおぼえている」という構成にして、「動作主＋他動詞＋目的語」という「働きかけ」の発想で表現する。
4. 後半の「秋であったこと」を‘the autumn’ という〈もの〉に実体化。
5. 「虫の音」という〈もの〉が「秋」という〈もの〉を‘suggest’ するという構成にして、またしても「動作主＋他動詞＋目的語」という「働きかけ」の発想で表現する。
6. 英訳の後半では、さらに関係代名詞を使って「虫の音」に結びつけ、前半の文章に堅く結合してしまっている…！

英語の「なる」表現——受動態

- 実際の受動態の用例を調べてみると、by 以下が表面には出ていない例が圧倒的に多い。つまり、受動態の文では動作主を、少なくとも表面からは隠してしまっている。
- 受動態には、動作の受動態ばかりではなく、状態の受動態もある。この状態の受動態の場合には、動作主性が非常に低くなっている。

⑧ The door *was shut*. ドアは閉まっていた。

⑨ Venice *is built* on a number of sand islands.

ヴェニスは、たくさんの砂地の島の上に立っている。

この *is built* というのは、*stands* という自動詞に置き換えても、ほとんど意味は変わらない。逆に、これを能動態に書き換えることは不可能である。

⑨ ≠ They built Venice on a number of sand islands.

受動態の⑨をこのように能動態に書き換えてしまうと、動作・行動を表わすことになって、「立っている」という状態を示す表現とは、意味が変わってきてしまう。

⇒受動態とは、〈動作主〉の概念を前面に押し出すのではなく、それらを排除しつつ、出来事の成り行き自体に重点を置く捉え方である。

能動態と受動態という対立は、〈する〉と〈される〉という関係にその本質があるのではなく、むしろ〈する〉と〈なる〉という関係に立つものとして捉える方が正当である。

日本語における欧文直訳調の定着という現象

⑩ This new law will clear the way for many educational improvements.

(欧文直訳調)

この新しい法律は、多くの点で教育改善の道を開くであろう。

(日本語の発想に基づいた意識)

この新しい法律ができれば、教育上、さまざまな改善の道が開けるだろう。

日本語も英語も、同じ人間の言葉であって、まったく非連続であるはずはない。相違と同時に、共通の面も実は大いにあるのである。さもないと、そもそも“翻訳”という操作すら不可能なはずではないか。それを忘れてしまっは、妙にゆがんだ言語的国粹主義に陥る危険さもあるだろう。英語と日本語との間での対比というもの、実は基本的な連続という大前提の上に立って、はじめて意味を持つことなのである。

【本日の講義で用いた文献】

- ◇ ^{あんざいてつ お}安西徹雄『英語の発想』（ちくま学芸文庫）
- ◇ 同 『英文翻訳術』（ちくま学芸文庫）

【英語を勉強しなおそうという人にお勧めの本】

- ^{ひろと}大西泰斗／ポール・マクベイのNHK3か月トピック英会話シリーズ
 1. 『ハートで感じる英文法』（NHK 出版）
 2. 『ハートで感じる英文法 会話編』（NHK 出版）
 3. 『ハートで感じる英語塾 英語の5原則編』（NHK 出版）
- 大西英文法の理論的バックボーン
 4. 『英文法をこわす——感覚による再構築』（NHK 出版）
- 大西泰斗／ポール・マクベイによる研究社の「ネイティブスピーカー」シリーズ
 5. 『ネイティブスピーカーの英文法——英語の感覚が身につく』（研究社）他 多数
- ^{しげのり}田中茂範教授（慶応大学）による英文法と英単語の解説
 6. 『文法がわかれば英語はわかる！——NHK 新感覚・わかる使える英文法』（NHK 出版）
 7. 『イメージでわかる単語帳——NHK 新感覚・キーワードで英会話』（NHK 出版）
 8. 『イメージでわかる単語帳 Part 2』（NHK 出版）
- 田中茂範教授の編集した英和辞典
 9. 『Eゲイト英和辞典』（ベネッセコーポレーション）